



小堀正一 篇2

建築家 正一

正一の父、正次は備中国全体の検地やほかの城門の建築を任せられていました。正一は、正次が1604（慶長9）年に死去すると、正次の所領の大半を受け継ぎました。正一は備中松山城の整備を進め、その整備の手腕を認められ、天皇の御所や徳川家康の隠居城でもある駿府城すんぶの建築、その後いろいろな城の土木工事および建設を任せられました。

そんな中、ある城の破壊を幕府から命じられました。ある城とは、宇陀松山城です。城は最後の城主である福島高晴が1615（元和元）年に領地を没収され、その年に破壊が決定されていました。破壊の時の様子は、正一と幕府の手紙のやり取りで分かっています。その内容は、「福島高晴の家臣は江戸におり、工事行う者がおらず作業員として雇っていた百姓も逃亡する者が予想よりも多かったです。ですが、大方の工事が終わりましたので近々、江戸へ赴き報告させていただきます」という内容でした。この手紙は、江戸時代初期に行われた城の破壊政策の状況が分かる一例として大変貴重な資料です。

正一は、1619（元和5）年に備中松山から一族の故郷である近江浅井郡（滋賀県長浜市）に領地替えとなり、1626（寛永3）年の二条城にせじょう行幸で重要な役目を任せられました。二条城行幸とは、将軍家が二条城で天皇家を迎え入れる一大行事です。正一の役目は、行幸を行うにあたり、様々な建物を建築し、当日のお食事も準備しました。

正一は、平和な江戸時代の茶人でありながら、幕府の役人として活躍した人物といえるのではないのでしょうか。

